

その時間の变化に合わせてお寺も変わり適応しなければいけません。その流れの一環として取り組んだのが「ボランティア・コーディネート委員会 (CCOV)」です。CCOVの目的はボランティアの基盤を強化することに有り、情報の保存と共有、新しい様々な活動を紹介することが出来るようになることを期待しています。さらに、今までボランティアをしたことのない人たちが良い形で巻き込んだり、年一回だった参加が二回に増えたりするような環境が作れたら、と考えています。

これから数年のうちにトロント本願寺が重要な行事を主催する予定ですので、ボランティアの需要は増えていくことが予想されます。2017年の4月にはカナダ浄土真宗定例総会の開催場所選ばれ、全国各地の代表が会する場となります。2018年の労働の日のある週末には東部地区仏教大会があり、カナダとアメリカの東部地区の各お寺の代表が集まります。更に2020年には私たちの仏教会の75周年記念行事が執り行われる予定です。食事の準備・配膳、来賓の方々への受付・お出迎え・送迎、そして他にも多くの仕

事が有り、皆様の助けが必要となります。これらの行事は他の会員と出会い協働する絶好の機会となりますし、他のお寺からいらつしやる友達と再会したり会員と知り合ったりすることも出来ます。

もしお手伝いしたいと思われたり、もっと詳しい情報を聞きたい場合は、トロント本願寺の事務に連絡を下されれば喜んで対応いたします。



私たちのお寺の強み

私たちのお寺の強みについて考えてみると、大事な共有資産の一つにボランティアの力が有ると思います。会員達は70年以上に亘り労を惜しまずお寺を支えてきました。時間を惜しまずお寺を維持し、食事を提供し、また私たちを楽しませてくれます。

お寺から離れたところでは、ルンビニ・キャンプを建て、都市部からの会員に癒しを与えたり、子供達のサマーキャンプに場所を提供したりしてきました。毎年、夏の本格稼働前にボランティアの方々からルンビニ・キャンプの準備をしに行き、きれいに掃除し設備の更新をします。そのおかげで毎年キッズサンガはキャンプを通して後々まで続く友情を育んだり楽しい時間を共有したり出来ているのです。

恒例のバザーは我々のお寺の大事な財源となっていていますが、この行事も多くの会員と協力者の方々が支えています。幸運にも、餡子

や巻き寿司、漬物などの日本の家庭の作り方を教えて下さる女性陣もいます。こんなことを習える場所は他にはありません。バザー当日やその前の週にお寺に来てボランティアとして参加されては如何でしょうか？

多くの新しい顔触れを見ることが出来るもう一つの恒例行事として、お正月を祝う餅つきが有ります。この行事の中心的な役割を果たして下さっている和歌山県人会の多くの会員を、改めまして讃え感謝致しますよう。こちらにも、餅のつき方を学べて友達も作れる良い機会となりますので皆さん挙って参加してみてください。

仏法は人生が永遠ではないと説きます。我々の生活（人生）もお寺も少しずつ変化していきます。両親が共働きであったり母子（父子）家庭で子供を養うために必死に働いたり。最早、仕事は月から金、9時5時ではありません。週末も仕事に追われる。そんな中、それでも会員や協力して下さる方々は時間を見つけて、僧を助け、様々な行事の運営をするなどのボランティアをして下さります。

『寺院からみる仏教』

トロント仏教会に初めて足を運んで下さる方がいた時、私は彼らと共にお寺がどういったものなのかを案内をします。

その案内では、日本の伝統的かつ宗教的なものを象徴した入口や、設計者が構想を重ねて手を込めた細部を紹介いたします。例えば、玄関に入ると自然と視線が上がる設計になっており、親鸞聖人の絵像を見上げるようになっていきます。

私たちのお寺は多くの細部まで拘った美しい形状からなっており、人を引きつける大切な場所となっています。

そのお寺に訪れた人を引きつける一つの要素として本堂があげられます。その本堂の中は、床と壁の木目が描く自然な線と共に、自然と阿弥陀如来と向かい合える形になっています。このように、本堂内は全て阿弥陀如来像を中心に考えられた構成になっています。

その阿弥陀如来像のある内陣の荘厳を整えることは、私にとって毎日の習慣となっています。私は不安や悲しみを感じているとき、本堂に座ると阿弥陀様を見上げて、まるで友人のように話しかけます。そして大変元気づけられます。しかしながら、私はその仏様からの呼び声に気がついていなかったのです。仏様の呼び声はいつも私の側にあっただけにも関わらず、私は常に自分のことばかりを考えていたのです。

仏様の教えは今ここに生きている私たちに届いていたものであります。それは私たちへの慈悲とそれを他のものへ分かち合う利他行であり、日々の生活に御恩報謝の気持ちを教えてくれるものであります。それらの教えは、この本堂に初めて参拝に来られた方に大きな影響を与えるものであります。

是非、次の機会でお寺にご参拝していただけるようでしたら、今まで気がつかなかった本堂や内陣の荘厳といった細部まで一度見渡してみたい。それらはとても細かいものではあります。それらから伝わるものが必ずあるはずです。

最後に第二十四代即如門主様の言葉を頂戴させていただきます。

「水や空気も含めて、すべての物がめぐりめぐってつながっている。山も川も私にいろんな恩恵を授けてくださっている。私もほかのすべてのいのちも阿弥陀さまに照らされ、救われるいのちとしてのつながりがある。地球上の万物すべて、いや宇宙の万物すべてが、大いなるいのちのつながりのなかにあるのです。」（『朝に紅顔ありて』より）



佛心

無常の風

二〇一五年
七月・八月合併号
浄土真宗 本願寺派
トロント本願寺

シャボン玉とんだ 屋根までとんだ 屋根までとんで
こわれて消えた
シャボン玉消えた とばずに消えた うまれてすぐに
こわれて消えた
風 風 吹くな シャボン玉とばそ

10月はカナダ教団創立の月でございます。1903年に13名の仏教徒有志が京都の西本願寺に開教使の派遣要請を懇願し、翌年1904年に佐々木千重先生が初代開教使として派遣され、早くも111年が経過いたします。皆さまにおかれましては、各仏教会の護寺に貢献頂き、教団を代表して厚く御礼申し上げます。

昔も今も、若くしてこの世での命を終えた方の葬儀を勤めることが少なくありません。いかに医学や科学が発展しようとも、ひとたび無常の風が吹けば、年齢を問わず消え去るのがこの命であります。皆さまの中にもお子様を亡くした方がいると思います。子を先に亡くす親の哀しは想像もつかぬものです。小さな子供を亡くした方の告別式で話す法話を考えていたときに、ふと童謡の「シャボン玉」の歌を思い出した。

昔からよく歌われるこの童謡ですが、作詞は野口雨情さん、作曲は中山晋平さんです。講談社から出版された『日本のふるさとのうた』の解説コラムには「はかなく消えた幼い娘への鎮霊歌か」と述べられています。なぜ、そのような表現をしたのでしょうか。この歌の歌詞は諸説あるようですが一番有名なのは、大正6年、野口雨情は作曲家の中山晋平ち童謡歌手の佐藤千夜子とともに、自作の童謡を広めるキャンペーンをしていました。そして四国の徳島に居た時に、2歳になった愛娘が疫病で急死したという故郷からの訃報が届いた。その時の雨情の哀しみ、幼子への愛おしさはいかばかりであったかは、想像に余るものがあります。その哀しみと愛おしさの中からこの詩が生まれ、改めてこの詩を読むと、雨情の愛と哀しみの心が溢れているのを感じとれます。

いのちはシャボン玉のようにもろく、はかない。無常の風が吹くとたちまちにこわれて消えてしまうようなものです。そのようないのちであればこそ、こわれずに今ここにあるいのちを有り難く感じるのではないのでしょうか。今も昔も、世界各地にて争いが絶えません。たとえどんな小さないのちであっても、その命をわけへだてなく救済する仏様のお慈悲とお智慧を戴いている命なのですね。皆さま、御法身体ご自愛くださいませ。

南無阿弥陀仏
カナダ開教区 総長
青木龍也

